

平成26年度 スーパー食育スクール事業 事業結果報告書

都道府県名	北海道
学 校 名	東神楽小学校
学校のホームページアドレス	http://www.town.higashikagura.lg.jp/gakkou/higashikagura/index.html

1 取組テーマ

食育と学力・体力の向上（健全な食習慣を形成し、学力・体力の向上を目指すための食育の研究）

2 栄養教諭の配置状況

栄養教諭配置年及び人数	平成 20 年	1 人
配置されていない場合の対応状況		

3 推進委員会の構成

① 北海道食育推進委員会

大学教授、14 管内北海道教育委員会指導主事、実践校関係者（校長、教頭、教諭、栄養教諭）、再委託先教育委員会職員、生涯学習課職員、農政部職員、代表栄養教諭

② 東神楽町スーパー食育スクール推進委員会

教育委員、連携機関（旭川大学教授）、実践校（校長、教頭、教務主任、栄養教諭、養護教諭）、協力校（教諭等）、道教委指導主事、学校 PTA・同窓会会長、町消費者協会、食育ボランティア等 40 名

4 連携機関及び連携内容

連携機関名	連携内容
旭川大学短期大学部生活学科食物栄養専攻	<ul style="list-style-type: none">・ 事業推進のための助言・ 児童生徒の栄養摂取量にかかわるデータ収集と分析・ 事業報告書の作成

5 実践内容

事業目標

北海道の児童生徒には、学力・体力に憂慮すべき課題があり、北海道一丸となって『ほっかいどう「学力・体力向上運動」を行うなど、子どもたちの学ぶ力や体力の向上にオール北海道で取り組んでいる。そこで、食育を大きな足がかりとして、子どもの生きる力を総合的に高めることを大きな目標とする。

実践校である東神楽小学校では、食に関する指導の6つの目標のうち、特に、「食事の重要性」と「心身の健康」、そして、「感謝の心」の3つを重点として掲げ、栄養教諭を中核として学校全体・家庭・地域と連携しながら食育の充実を図り、生活や学習の基盤となる望ましい習慣の改善と定着を図る。

こうした取組を通し、学力や体力の状況と食事内容の状況、生活習慣・食習慣の状況、身体状況、給食における地場食材利用拡大等を大学研究者と共同で調査・分析・研究し、独自の評価方法を設定してより科学的な成果獲得に努め、学力・体力の向上を目指す食育の成果をまとめ、普及させることを目標とする。

本事業を通して、子どもたちには、学年の発達段階に応じて次のような子どもの姿を目指す。

●小学校低学年

- ・好き嫌いせずに食べようとする子
- ・朝ごはんをしっかり食べようとする子

●小学校中学年

- ・健康に過ごすことを意識して、いろいろな食べ物を好き嫌いせずに食べようとする子
- ・正しい生活習慣で過ごそうとする子

●小学校高学年

- ・食事が身体に及ぼす影響や食品をバランスよく組み合わせて食べることの大切さを理解し、一食分の食事が考えられる子
- ・自らの健康・体調を維持しようとする子

評価指標

指標1 学力・学習状況調査の正答率(対全国比)

- ア 児童質問紙にある学習の取組み方などに対する否定的な回答の減少
- イ 教師による児童の観察により「学習に集中できていない児童」の減少

指標2 体力・運動能力調査の結果

指標3 食と生活習慣の改善

- ア 学校独自の児童・保護者アンケートの質問に対する肯定的回答率の上昇
- イ 家庭学習の時間
- ウ 1日のテレビの視聴やゲームをする時間
- エ 1日の読書時間
- オ 孤食や不適切な栄養バランスの食事の児童

評価方法

指標1 全国学力・学習状況調査、指定校独自の学力テスト等の結果

- ア 児童質問紙の活用・分析
- イ 標準学力検査 NRT(春)・CRT(秋)2度の実施による26年度内の成果と課題を確認する
- ウ 教師による児童の観察

指標2 全国体力・運動能力調査、運動習慣調査結果

年2回(6月と11月)実施し、26年度内の成果と課題を確認する。

指標3 食と生活習慣の改善

- ア 児童・保護者アンケート
 - 例)「早寝・早起き・朝ごはんができています」「給食を残さずに食べている」等
- イ 学童検診
 - 例) 体温検査、血液検査、不定愁訴検査等
- ウ 「小学校高学年のための食事質問票」による食事・栄養摂取状況の把握
- エ 給食残量調査

評価指標を向上させるための仮説(道筋)

栄養教諭と学級担任のTTによる食育授業、ランチルームでの全校給食を活用した日常的な指導を中心に、学校農園を活用した食育授業、地域が連携した体験的活動などを取り入れて、学校における食育を充実させるとともに、講演会の開催や「生活リズムチェックシート」の奨励等により保護者・家庭への啓発を強化し、家庭教育力の向上を図ることによって、健全な食習慣が形成される。

それによって、子どもたちの学び意欲やよりよく生きようとする思いを高めることができ、学力・体力の向上により成果が得られるものとする。



実践内容

実践校である東神楽小学校は、1学年1学級で全校児童208名(平成26年5月1日時点)が在籍しており、全員が一堂に会すことのできるランチルームで毎日給食を食べている。

このランチルームでは縦割り構成の班ごとに給食を食べており、異学年同士の交流を深めている。



本事業において、子どもたちが望ましい食習慣を身につけるために行った「栄養教諭と学級担任のTTによる食育授業」では、6つの食に関する指導の目標を踏まえるとともに、下記3つの視点を設定し授業を実践してきた。

6つの食に関する指導の目標

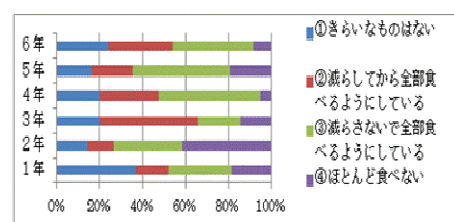
食事の重要性	食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解する。
心身の健康	心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養や食事のとり方を理解し、自ら管理していく能力を身につける。
食品を選択する能力	正しい知識・情報に基づいて、食物の品質及び安全性等について自ら判断できる能力を身につける。
感謝の心	食物を大切にし、食物の生産等にかかわる人々へ感謝する心をもつ。
社会性	食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身につける。
食文化	各地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し、尊重する心をもつ。

上記を踏まえた授業づくりの3つの視点

- 視点1 アンケートや児童の感想などから指導を工夫し、児童の確かな変容を見取る工夫
- 視点2 グループによる活動や体験的活動を積極的に取り入れ、望ましい食習慣を身につけようとする意欲を高める工夫
- 視点3 栄養教諭の専門性に基づく食に関する情報・知識・技能などを生かした指導の工夫

視点1に基づく実践例 2年生 生活科 「学校農園大作戦 — 野菜について知ろう！」

4月に食に関するアンケート(右表参照)を実施し、『給食で嫌いなものが出たときにはどうすることが多いですか?』という問いに対し、「ほとんど食べない」と回答した児童が多数いた。そこで、直近3日間の給食で実際に出される野菜の種類や栄養を示し、体にとって野菜が重要な働きをすることを中心に授業を展開した。



また、「必要な量の野菜を食べるには煮るとかさが減り食べやすくなることを、具体物を用いて体感する」など、日常生活を想定した活動も取り入れた。



こんなに採れたの！すごいね！一緒に草取りもしたのね！親としても嬉しい！



このゴツゴツした手触りは、おいもかな・・・？



私たちが育てたじゃがいもです！皆さんで食べてみてください！



玉ねぎは血をきれいに করতে聞いたことあるよ！

およそ 30a の広大な学校農園では、生活科や総合的な学習の時間等で栽培・試食・調理活動を行っている。

畑起こしは PTA に整備してもらい、栽培の過程では地域のおじいちゃん、おばあちゃんに組織されている「GTA」などのお手伝いのもと、収穫を目指して取り組んできた。夏の暑い日の草取りは、児童や教職員に加え、保護者も参加して苦勞を共有してきた。

視点2に基づく実践例 4年生 学級活動 「食べ物の働きを知ろう！」

4年生はほとんどの児童が好き嫌なく食べることの大切さを理解しており、給食で出されたものは残さず食べようとする意欲を持っている学年である。

そこで、食べ物の働きを知ることによって、食への関心をさらに高めてもらいたいと考えた。本時では、給食にいろいろな食材が使われていることを知り、食べ物は健康な体を作るだけでなく、元気に運動や学習をする上で重要な働きをしていることを理解し、バランスよく食べる意欲を持たせることを目的とした。



人参はこのグループかな？



さて、これは今週出た給食の写真です。『？』のここには何が写っているでしょうか。

食べ物への興味をもち、大切に食べようとする思いを育てるため、栄養教諭による「今日のメニューミニミニ話」を全校給食の場で行った。

題材には、ほうれん草や小松菜など東神楽産の野菜を中心に、目の前にある食材や栄養価などついて年 14 回の実施となった。

視点3に基づく実践例 1年生 学級活動 「給食ができるまでを知ろう！」

給食ができるまでには多くの方が携わっていることや、給食を作っている人の努力、願いについて知り、感謝の心をもって食事をしようとしたり、食事のマナーや当番の仕事などを理解し、協力する心や楽しい食事の場づくりを心がけたりする態度を育てる。



へらはカレーを作るときに野菜を炒めたり、ルウを混ぜたりするのに使います。



調理する段階によって、使うエプロンが分けられています。

6 成果

本事業の推進にあたっては、学力や体力、運動能力の向上がよりよく生きようとする思いや学ぶ意欲などの姿勢に起因しており、これらの姿勢は望ましい食習慣の定着によって高められるという仮説の基、主に、①栄養教諭と学級担任の TT による食育授業や②全校給食を活用した日常的な指導、③家庭教育力向上のための働きかけの3つの取り組みを行ってきた。

これら3つの取り組みが学力や体力、運動能力に与えた効果について検証を行った結果、児童へのアンケート調査において「早寝・早起き・朝ごはんができています」「給食を残さず食べている」などの項目に改善が見られた児童(表1)は、「よりよく生きようとする思い(表2)」「学ぶ意欲(表3)」や、その他「新体力テスト」などの項目にも改善が見られ、教職員もそういった児童に対して「生活習慣が改善された(あくびをする回数が減った等)」「学習習慣が改善された(授業中の発言が増えた等)」の肯定的な評価をしている。

以上のことから、望ましい食習慣の定着は、よりよく生きようとする思いや学ぶ意欲などの向上に寄与していると考えられる。

また、生活習慣の定着度や学習習慣の定着度の相関性について、よい生活習慣が定着している児童はよい学習習慣も定着しており、標準学力検査偏差値と比較しても、生活習慣や学習習慣の定着度が高い程標準学力検査の結果も高い傾向にあることが明らかとなった。

表1 「生活習慣」にかかわる項目

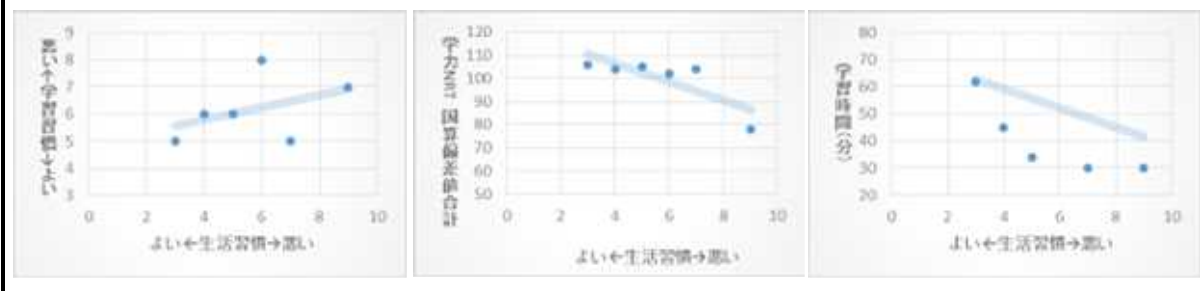
	1学期3点以上	2学期3点以上
早寝早起き朝ごはんができています。	89%	92%
給食は残さずに食べています。	87%	89%
テレビやゲームをしたりする時間は2時間以内です。	87%	91%

表2 「よりよく生きようとする思い」にかかわる項目

	1学期3点以上	2学期3点以上
係活動や掃除をしっかりとやっている。	99%	99%
友達と話をしたり遊んだり、仲良く過ごしている。	99%	99%
友達や先生の話もしっかり聞いている。	97%	98%
自分が立てた目標について頑張っている。	95%	96%
いじめや人の嫌がることをしていない。	98%	98%
体育の時間や休み時間に体を動かしている。	94%	96%

表3 「学ぶ意欲の高まり」にかかわる項目

	1学期3点以上	2学期3点以上
家庭学習に取り組んでいる。	78%	89%
読書が好きだ。	94%	95%
学校は楽しい。	97%	97%
勉強がわかりやすい。	95%	97%



7 スーパー食育スクール事業の取組状況の情報発信

東神楽小学校のホームページをはじめ、学校だよりや学級通信を活用し、事業の取組状況等について情報発信を行っている。

8 今後の課題

分野的に短期間での効果検証が困難であることや検証方法の検討が不十分であったことなどが起因し、定量的な成果が得られなかった。そのため、本事業の取り組みを継続するとともに、この分野に特化した研究機関との連携をさらに強化することによって、より定量的な検証を行わなければならない。

中でも、「標準学力検査の正答率」について数値自体は向上しているものの、望ましい食習慣の定着を目指した仮説の実践を継続することで更なる学力向上が期待される。

また、「1日のテレビの視聴やゲームをする時間」や「1日の読書時間」について改善がみられなかったため、家庭による望ましい食習慣の定着に重点を置き、より広範的な事業推進を行わなければならない。

さらに、栄養摂取状況と体力との相関性について、平均的にタンパク質が推奨摂取量の約1.5倍、食塩相当量が約1.4倍と多い反面、鉄分が約0.9倍、ビタミンB1が約0.8倍と少ない傾向にあることが分かった。このことから、体力面で向上している一方で栄養摂取状況に大きな変化はみられず、両者の相関性は見いだせなかったと言える。